

フィリップ・メドウズ・テイラーの『シータ』について

小西真弓

序

インド大反乱と言えば、イギリス帝国史上、本国のイギリス人を最も震撼させた出来事として知られている。1857年5月、メーラトのセポイが蜂起して以来、イギリスの婦人や子供を巻き込む忌まわしい一連の事件を伝えるニュースやドキュメンタリーは、植民地経営に関わる人々ばかりではなく、それまでインドにあまり関心のなかった一般大衆や、アルフレッド・テニソンのような詩人にもセンセーションを巻き起こした。¹⁾

大反乱は、2年ほどでイギリス側の勝利によって終息したものの、その衝撃は半世紀あまりも余韻を残し、一連の事件を題材にした「反乱小説」(Mutiny Novels)と呼ばれる作品が20世紀に至るまで数多く出版された。²⁾しかし、それらが今日、文学作品として鑑賞されないのは、パトリック・ブラ

ントリンガーが指摘するように、³⁾イギリス支配者 = 文明・正義 / インド人反徒 = 野蛮・悪という二項対立的パターンに基づいて物語が構成され、大反乱という歴史的な大事件に対する中立的なヴィジョンや洞察力が欠落しているためであろうか。なるほど、イギリス人をカーンプルで騙し討ちにした事件や、その首謀者だとされるナーナー・サーヒブの残虐性は、あらゆる物語の中で繰り返し強調されているが、イギリス側がしばしば反乱の鎮圧に乗じてインド人の財産や生命を無差別に奪ったことに言及したり、大反乱の原因となった問題の本質が考察されている作品はごく僅かである。このような傾向は、とりわけ1880年代までの「反乱小説」に著しいが、本稿で紹介する1872年に出版されたフィリップ・メドウズ・テイラーの小説『シータ』(Seeta)は数少ない例外的作品の代表として評価されている。

* テキストには、Philip Meadows Taylor, *Seeta* (1881; rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1989) を使用した。本文中の括弧内の頁数は全てこのリプリント版によっている。

1) テニソンは、インド大反乱にインスピレーションを受けて、「ハヴェロック」(“Havelock”), 「ラックナウの防禦」(“The Defence of Lucknow”) を作詩した。 *The Poems of Tennyson*, ed. by Christopher Ricks (London: Longman, 1969) 1105, 1251-53 参照。

2) Hilda Gregg, “The Indian Mutiny in Fiction,” *Blackwood’s Magazine* 161 (1897) 218-31 参照。

3) Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914* (Ithaca: Cornell University Press, 1988) 199-208 参照。

1860年にインドから帰国したテイラーが、その後『シータ』を執筆するにあたって、自らのインド体験に基づいてインド大反乱を語り、登場人物を性格付けたことは、彼の自伝「私の人生の物語」(*The Story of My Life*)によって理解できる。⁴⁾ インド各地でイギリス支配に対する蜂起が勃発していた間、彼はハイデラバード藩王国の辺境ナルドゥールグヤイギリスに割譲されたベラル地区で、デリーやラックナウからの反乱の飛び火に警戒し、当地の平安を守るように命令されていた。当時デカン高原の大部分を支配していたニザームの反乱に対する意向は、イギリスのインド支配の命運を分けるほど影響力があったので、反徒の群れや密使の藩国内への侵入を防ぐのも、重大な任務であったようである。

もっともインド大反乱において戦場となったのは主に北インドであり、ハイデラバード藩王国に限っては、土着のイスラム権力者とデリーの反乱政府との利害が一致しなかったためか、おおむねイギリス支配者らに忠実であり、軍隊も統率されていたようである。ところが、メーラトの蜂起以前に、アウランガバードから到来した「反乱を扇動した密使」は、ひそかにセポイたちと連絡を取るばかりではなく、街頭で壁にビラをはったり、集会を開いて公然とイ

ギリス支配の打倒を民衆に促していた。そのために、ハイデラバード市のイスラム教徒の中には、1857年7月、ロヒラ人と共に牢獄に繋がれていた反乱の指導者を脱獄させたり、イギリス人官舎の襲撃に加わって軍隊に鎮圧され、アンダマン諸島送りとなった者もいたと言われる。⁵⁾

この間、辺境に駐在していたテイラーはハイデラバード市の騒乱に直接巻き込まれることもなく難を逃れたが、後見人として長年庇護した隣国ショラプール(Shorapoor)の若い国王、エンケタパ・ナイク(Enketapa Naik)が反徒に唆されて蜂起したことに憤りを感じる。国王の告白によれば、彼は外部の扇動者から、自国の兵士を先導して反乱に加担すれば、デカン高原全体の王者になれると吹聴されたが、思い止まった。しかし、乗り気になった家臣たちが彼を「臆病者、愚か者」と非難したり、勝手に勅書を発行してしまったので、やむなくイギリス支配に反旗を翻す羽目に陥ったという。事の真偽はともかく、ショラプールの反乱軍はイギリス軍のみならず、ニザームの軍団にも攻められて敗走し、捕えられた国王は死刑を宣告される。結局、テイラーらの計らいによって最終的に彼に対する死刑宣告は、情状を酌量されて5年間の軟禁にまで減刑される。しかし24歳の誕生日を目前にしながら国王は、事故かあるいは覚悟の自殺か、護送される途中でピストルで自らを撃ってしまったのである。⁶⁾

4) Philip Meadows Taylor, *The Story of My Life*, ed. by his daughter (1877; rpt. New Delhi: Asian Educational Service, 1986) 226-331参照。

5) ヴィナヤック・ダモダール・サヴァルカール(Vinayak Damodar Savarkar)は名著*The Indian War of Independence*の中でショラプールの反乱について触れている。V.D. サヴァルカール著、鈴木正四訳「セポイの乱」『世界ノンフィクション全集7』(筑摩書房、1968)、65頁参照。

6) Taylor, *The Story of My Life*, 306-31参照。

ショラプールの蜂起に関してテイラーが非難の矛先を向けたのは、反乱の先頭に立った国王ではなく、彼を扇動した狂信的なヒンドゥー教徒やイスラム教徒であった。歴代のヒンドゥーやイスラムの支配者の日和見主義や、激しやすい性格を理解していたテイラーにとって、国王がある日突然、謀反を起こすのもさほど衝撃的ではなかったかもしれない。しかし、一般民衆の平和な生活を脅かし、イギリス インド双方に多数の犠牲者を出したばかりではなく、ショラプールの国王と自分との間に「割り込んで」両者の親子のような信頼関係を損なった反乱の扇動者を、彼は断じて許すことができなかった：

特にみんなの先頭に立った国王に責任があり、彼がハイデラバードで裁きを受けたからといって、怨恨を蒸し返すのはよくない。ショラプールには、聖戦を説いて多くの災難の火種となったイスラム教徒が一人がいた。その男が私の覚えている邪悪なブラフマンのクリシュナ・シャストリーと組んで、予言者であり奇跡的な力をもつふりをした。他ならぬこの二人こそ、偽りの予言と悪たくみによって国王を惑わした危険人物であり、死罪あるいは少なくとも終身流刑に処されるべきであった。⁷⁾

メーラトで始まったセポイの反乱が、一般民衆も巻き込んでインド各地に広がった原因を、反乱の扇動者らが「ブラッシーの戦い後百年にして、東インド会社の支配は転覆する」という予言や、「新たに導入されたエンフィールド銃の薬包に牛や豚の脂が塗られているのは、セポイをキリスト教徒

にするためだ」というような噂を吹聴したことに求めるのは、テイラーのみならず、19世紀後半のヴィクトリア朝の人々に膾炙された見解である。⁸⁾ 自らの人種的優越性を信じて疑わなかったイギリス支配者らは、そのような流言に惑わされるインド人を迷妄の世界から救い出すためにも、反乱を武力で鎮定して自分たちの力を誇示することを正義のように感じていたに違いない。テイラーにしても、巷には犯罪や不正がはびこっていたショラプールに一応の平安をもたらしたためか、イギリス人がインドの行政や司法を掌握すること、それ自体には意義を感じ異論を唱えることはなかった。彼にとって、インドの文明化に貢献するイギリス人を一掃しようとした反徒らは、排除されるべき存在に思われた。このような彼のインド大反乱に対する見解は、『シータ』に登場する東インド会社の文官シリル・ブランドンと、反徒の首領アズラエル・パンドとの対照的な性格付けに反映されている。

シリル・ブランドンが東インド会社に職を求めたのは、当時の上流階級の次男にありがちであったように、イギリスではかなえられない立身出世の夢をインドに託したからであった。アン女王時代に爵位を授かったヒルトン男爵の子孫とは言え、先祖代々の所領は祖父や父親の代にかなり縮小し、次男の彼には、名門の出にふさわしいほどの財産を相続する当てもなかった。そ

7) *Ibid.*, 324-25

8) インド大反乱の原因については、Surendra Nath Sen, *Eighteen Fifty-Seven* (Delhi: Publications Division, Ministry of Information & Broadcasting, Government of India, 1957) 1-39参照。

のために、「彼はインドとその歴史や人々に魅惑され続けていた。当地で名声を得た偉大な人物の研究をして、彼らと競いたい気持ちにもなったのである。イギリスでは、生涯あくせくする以外に、名を揚げる見込みはないように思われた(67)。そんな気持ちを察した両親は、彼が植民地官僚養成学校ヘイリーベリーへ入学し、インドへ赴くことを許す。そこでシリルは在学中にインド統治に必要なサンスクリット語やペルシャ語に習熟して、東インド会社の文官採用試験に優秀な成績を収め、希望通り自分の判断で任務を遂行できる「条例外の諸州」(Non-regulation Provinces)の一つノールプールに配属される。⁹⁾

そこで6年余り治安維持や行政に献身したシリルは、「多くやばな詩人が彼を称える物語詩を書き、吟遊詩人がそれらを村の祭りで歌った(69)と言われるほど、村人の人気を集める。村人にとって、単なる有能な為政者であるばかりではなく、当時のイギリス人としては珍しく、インドの古典を愛読し、土着の風俗習慣を尊重して民衆に接するシリルは、打ち解けやすい魅力的な人物であった。しかし、公の任務となると、彼は「たいそう厳格かつ公明正大で、誰も彼が賄賂を取ることは夢にも思わなかった。おべっかにも乗らなかつたので、彼にあえてごまをする者もいなかった」(79)。

平和時には、ヒンドゥーやイスラムの民衆に交わりながらインド支配に貢献する一方で、アズラエル・パンデの率いるダコイツ(Dacoits)や謀反人に対して「厳格」な態度を取るシリルに、インド支配に実際に携

わった作者自身の姿勢が投影されていることは、想像に難くない。シリルがアズラエル一派を排除してシャー・グンジェへ凱旋する様子は、反乱を鎮圧して平和を取り戻したイギリス人のインド支配の正当性を象徴しているように感じられる：

シリル・ブランドン氏は、民衆を地域の卑しい圧政者から解放するばかりではなく、政府の権威をしっかりと納得の行くように立て直して、国内を押し進んだ。彼には、民衆が法律や慣習が元通りになってたいそう喜んでいるという確信があった。イギリス支配者らは、厳格で思いやりに欠けていたかもしれないが正義だった。彼らは、個人にも国全体にも平安をもたらした。そして強者の弱者に対する暴政は終わった。シリルの行進は、正に凱旋のようであった。(399)

反乱軍を弾圧したイギリス支配者らが、「思いやりに欠けていた」かどうかはさておき、シリルに限っては、インド人に共感をもつ理想主義的な植民地支配者として描かれていることは疑問の余地がない。そんな彼によって、ノールプールのイギリス人官邸を襲撃したアズラエル・パンデが罪を暴かれ、破滅に追い込まれるという顛末は、インド大反乱に憤ったイギリス本国の読者の溜飲を下げたであろうか。アズラエルがかつて第34連隊にセポイとして所属し、脱退後12年間に亘って北インド中に反乱を吹聴したブラフマンであり、しかもバラックプールで謀反を起こして歴史に名を残したマンガル・パンデ(Mungal Pande)の叔父となれば、彼の破滅はよりいっそう必然的に感じられる。

9) 作者はノールプール、シャー・グンジェが、架空の地名であると物語の序の中で断っている。Taylor, *Seeta*, x 参照。

アズラエルの性格付けに関して、物語の序には「彼に当時の反乱を扇動した密使や謀反人らの性格を出来る限り投影した。彼らは、悪意に満ちて執念深く、狂信や盲目的な憎しみから人間なら震え上がるような犯罪を犯したり、扇動した」(ix)という作者の注が加えられている。確かに「謀反人」としての彼の悪党ぶりを描く作者の筆致は、ヴィクトリア朝の典型的な「反乱小説」で浮き彫りにされるナーナー・サーヒブの残虐な性格描写と一致する。それにしても、彼がインド人にとっても排除されるべき悪党に感じられるのは、ダコイツらを率いて、シータの夫ハリー・ダスを金目当てに殺害したり、反乱に乗じてシータを誘拐して凌辱しようとした罪が付加されているからであろう。

そのために彼とシリルとの差異がより明確となり、反乱を鎮圧したイギリス支配者が正義の味方と確信されるとしたなら、なるほどこの物語は、大英帝国のプロパガンダ的な「反乱小説」であると言えるかもしれない。しかし、実際には『シータ』がそのような小説として評価されていないのは、アズラエルのような悪党が、イギリスのインドに対する政治経済的な搾取を露骨に批判しているからであろうか。¹⁰⁾ 様々な社会経済史家によって研究されているこの問題は

さておき、アングロ・インド小説批評の先駆ブーパル・シングが、この物語を大反乱を背景とした恋愛ロマンスとして評価していることは注目に値する。確かに彼女が指摘するように、¹¹⁾ ヒンドゥー哲学に傾倒するシータがキリスト教徒のシリルの妻となるという筋立ては、「現実にはありそうもない」と言えようが、登場人物の異人種間の結婚への対応を通して、作者が大反乱の経緯を辿ろうとしていることは、重要な意味をもつ。

シリルとシータの出会いは、金品強奪が目当てでハリー・ダスを殺害したアズラエル一味の犯罪を暴く裁判に始まる。その法廷に判事として臨席したシリルは、証言台に立った若くて美しく、しかも事件のあらましを理論整然と陳述するシータに知的な魅力を感じる。それまで彼にとって、ヒンドゥー女性と言えば上流カーストでも、「物静かで慎み深い」が、臆病で興味を引かれない存在に感じられた。しかし彼女は例外であった。話し方や筆跡に知性を感じさせるうえに、イギリスの判事や多数の聴衆の前で、彼女に止めを刺すのをためらったアズラエルの手下の助命を懇願するほど優し

10) アズラエルは、次のように東インド会社のインド政策を批判している：

東インド会社は昔とは変わった。もう俺たちの神々の化身ではない。それはイギリス政府からやってきて我々の広大なヒンドスタンの徴税を請け負い、運べるだけのもの全てを持ち去る卑しい嘘つきの泥棒に変わってしまった。あの向こうに浮かぶ巨大な船は、貧しい小作人が作った綿花や藍、絹をイギリス以外のどこへ持っていくというのか。奴らはかわりに、何かもって来たか...それから聞いてくれ。同じ年に、自分の旗と一緒にイギリスの国旗を竿に掲げていたジャンシーの王が子孫のために、イギリス人に自分の小さな国を後見してくれるように遺言して逝った。だけど、奴らは自分たちでそれを乗っ取って手放そうとしない。西の方では、奴らは、サッタラをぶんどって、シヴァージーの一族は乞食になった...Taylor, *Seeta*, 147-48.

11) Bhupal Singh, *A Survey of Anglo-Indian Fiction* (London: Curzon Press, 1974) 49参照。

く健気な女性でもあった。

そんな彼女とシリルが個人的に親交を深める発端は、シータや彼女の祖父ナレングの一家を、脱獄したアズラエルの率いるダコイツから彼が守った事件であった。アズラエルは取り逃がしたものの、ダコイツとの格闘で負傷したシリルはナレング家にしばらく滞在し、シータから手厚い看護を受ける。近所の評判通り、彼女はインドの古典を愛読して、その宗教哲学に精進しようとする才気煥発な女性で、その知的な魅力はシリルの心を虜にしていった。一方のシータも、いかに任務のためとは言え、身を挺して自分の命を守ってくれるばかりではなく、ヒンドゥーの学問に造詣の深い彼に心を引かれるようになる。彼女にとって、「サーヴィトリー物語」を¹²⁾ サンスクリット語で朗唱してくれるようなシリルは、夫を失って茫然自失としていた心を蘇らせてくれるような存在であった。孤独であった若い二人が、インドの古典を語り合ううちに、お互いに心を引かれるようになるのも不思議ではなかった。しばらくするうちに、シータのことが忘れられなくなったシリルは、彼女の幼子の死をきっかけに、彼女に「一緒に住んでくれるように」手紙で頼むべきかと思ひ悩み始める。

しかし、東インド会社がインド女性をイギリス支配者の正妻にすることを公認しなかったためもあり、¹³⁾ 文面に悩んだシリルは手紙をしたためることを憚る。またシータも、ヒンドゥー寡婦という立場もあり、

シリルへの思いを口に出すことはできなかった。そんなシータの身の上を案じた叔母のエラは、シリルに転勤して永遠に自分たちの前から姿を消すように嘆願する。彼女の望み通り、シリルは一たんは遠方に配属されることになるが、まもなく再びナレング家の近くに駐屯することになってしまう。それどころか、彼はどうしてもシータと結婚したいと告白して、エラを卒倒せんばかりに驚かす。無論、為政者とは言え、異教徒の彼からの結婚の申し出をシータの側から断るのは無礼ではなく、理にかなったことであった。しかし、意外にもシリルの気持ちを確認したシータが彼と人生を歩みたいと言い出すので、事態は単純に解決できなくなる。

ヒンドゥー教徒の慣わしとして 異例なシリルのプロポーズに対処しなくてはならないのは、シータの父親がわりのナレングであった。一人では解決しかねるこの問題に直面した彼は、当事者のシリルやインド人書記のバーバー・サーヒブ、ナレングの家庭祭司でブラフマンのウォーマン・パートラを呼んで合議する。東インド会社やシリルの家族の意向はともかく、一同にとって二人の結婚の前に立ちほだかるのは、ヒンドゥー教徒であるシータが、キリスト教徒のシリルと再婚できるかという問題であった。確かに、シュードラに色分けされるソーナール(金細工師のカースト)は、二度目の結婚ができるという慣習があるので、シータの再婚そのものは許されるべきで

12) 「サーヴィトリー物語」は、死神ヤマの手から夫を取り戻す貞女の物語で「パティヴラター・マーハートゥムヤ(貞女の鑑)とも呼ばれ、『マハーバーラタ』の第3編、293-99章を成している。「サーヴィトリー物語」『インド アラビア ペルシア集』、筑摩世界文学大系 9(筑摩書房、1974) 50-62頁参照。

13) 東インド会社は、1835年以降、異人種間の結婚を許さなかったと言われる。ロナルド・ハイアム著、本田穀彦訳『セクシュアリティの帝国 近代イギリスの性と社会』(柏書房、1998)、158頁参照。

あった。またナレンダの家系は、グルバルガのイスラム皇子とソーナールとの娘の間に生まれ、ピーダルの国王になった人物を元祖とするので、「当地の新たな王の一人〔シリル〕が、今またナレンダ家から娘を一人求めるなら、シータを授けてもいい」(130-31)ように思われた。シリルが指摘するように、実際にはヒンドゥー女性を妻にしたイギリス人も少なくはなかった。¹⁴⁾

無論、この問題をもっとも手っとり早く片づける方法は、シータがキリスト教徒に改宗して二人が教会で結婚式を挙げることであり、それができれば彼女は正式にシリルの妻として認められるはずであった。しかし、シータにとって、生活様式のみならず物の考え方まで支配するヒンドゥー教を放棄するのは容易ではない。また、いかに愛する人のためとは言え名目だけでもキリスト教徒に改宗すれば、ヒンドゥー教徒の身内にとって彼女は死んだも同然の存在となり、親族の宗教的な行事にも参加できないばかりか、祖父や叔母と食事を共にすることも禁じられてしまう。結局、シータの境遇や心中を察したシリルは、彼女が将来的に改宗して教会で式を挙げることを期待しつつ、とりあえずヒンドゥー風の結婚式によってシータを妻に迎える。

現実的な問題として、19世紀の後半にシリルとシータのような異教徒、異人種間の結婚が東インド会社の関係者ばかりではな

く、インド人や本国のイギリス人にもタブー視されがちであったことは言うまでもない。それは『シータ』の中では登場人物の二人の結婚に対する見解からも窺い知れるが、この問題を議論するにあたって、明確な論拠や統一的な見解がないというのも、英領インドの複雑な民族や宗教の交錯を表しているように思われる。

まず、インド人の側から二人の結婚が批判されるのは、ソーナール・カーストのパンチャーヤトが表明するように、「それはブラフマンが解釈する一般法によっては認められるかもしれないが、カーストの慣習に違反する(174)ためである。すなわち、ヒンドゥー法典よりも、慣習を重んじるソーナールにとって、寡婦がキリスト教徒に嫁いだという前例はないので、両者の結婚は公認し難く、カーストの掟破りと見なされた。かつてナレンダの一族の娘がイスラム教徒に嫁したという論拠も、この判断を覆すほどの効力はなかった。とは言え、さすがに保守的なソーナールの長老たちにも、ブラフマンが取り仕切り、「当地の新たな王」となったシリルが誓った結婚を無効にしたり、彼の妻となったシータを咎めることは憚られた。その一方、彼らは二人の結婚の責任をナレンダに負わせて、彼にソーナールの慣習違反の贖罪として、ベナレスへの巡礼や同胞への大盤振る舞いをさせて、カーストへの復帰を許す。このことを知ったシータは、ごく自然な感情から踏み切ったシリルとの結婚が罪であるような気になって、次のように思い悩む：

14) ハイアム、前掲書、155-57頁参照。

最初の興奮が収まった後、シータはじっくり考え始めた。祖父たちは本当に穢れて、社会的な地位を失ってしまったのだろうか。彼女は祖父がソーナール・カーストの長でシャー・グンジェばかりではなく、国の至るところでみんなから尊敬されていた昔のことを思い出した。人々はよく彼のところに難題を持ち込んだ…今や彼の名誉は汚され、多額の費用をかけて公に償いをしなければ、その汚名を濯ぐことができなくなってしまった。彼女はこれらすべてを一時間、あるいはそれ以上一人で考えた時に、彼女自身の身勝手さや情熱がこの不幸の原因だという気持ち、いや確信に押しつぶされそうになった。そして彼女は手で顔を覆って喘ぐほど、胸から湧き出た熱い血が首や顔に上って体が燃えているように感じた。以前にも、これと同じように、彼女はしばしば夫の愛撫が毒で自分が穢れるという忌まわしい恐怖感に駆られることがあった。そんな思いは、今や倍になって彼女の内面に蘇った。以前は、夫の愛や自らの信仰を信頼すれば、その恐怖を払えたが、今回はできなかった。彼女の魂は、さらなる誘惑や罪から立ち逃げて、すぐさまベナレスに旅立ち、そこで懺悔して穢れを清めるように呼びかけているように思われた…(175-76)

シータがこのように罪の意識を抱くのは、彼女の心の奥に、一人の夫のみに身を捧げ誠を尽くすという「パティヴラター」の理念が刻まれていたからであろうか。プラーナ聖典が説く女子への戒めは たとえそれが不自然で道義にかなわぬように感じられても 平凡に生きるヒンドゥー女性のみならず、ブラフマンが独占するような学問

を窮めようとする進歩的なシータの内にさえ浸透していたようである。確かに、当時のヒンドゥー教徒の中には、イーシュワルチャンドル・ヴィディヤサーガル(1820～91)のように、ヒンドゥー寡婦の再婚を積極的に推進して、女性を貶めるインド社会を改善しようとした人物もいた。¹⁵⁾しかし、ヒンドゥー教徒の多くは、相変わらず寡婦を不浄と見なして家族の儀式から疎外し、彼女たちに白衣を着せて家事を手伝わせ、何の楽しみもないような生活を送らせることを、一家の誇りとしていたのである。このことは、何よりも、ヴィディヤサーガルらの働きかけでイギリス政府が立案したヒンドゥー寡婦の再婚認可に対して、インド側の反対者が賛成者を数的に上回っていたことから理解される。¹⁶⁾

物語の中でも、そのようなヒンドゥー社会の様相を描いているのは、寡婦のエラがベナレスへ巡礼した後に剃髪し粗末な衣服を纏って、隣人の尊敬的になるというエピソードである。なるほどシュードラの彼女は、寡婦となっても兄ナレンダの庇護下で家事に専念する限り、周囲の人々からありふれた髪型や身なりを批判されなかったはずである。にもかかわらず彼女がブラフマンの寡婦のように世を捨てた姿に甘んじるのは、ヒンドゥー教への帰依を誇示して、シータの再婚のためにナレンダ家が被った汚名を濯ぎたかったからであろう。彼女のこのような行動や周囲の反応は、現世を否

15) ヴィディヤサーガルは、ヒンドゥー法典の解釈によって、ヒンドゥー寡婦の再婚の正当性を唱えた。Isvarachandra Vidyasagara, *Marriage of Hindu Widows* (Calcutta: K.P. Bagchi & Company, 1976) 参照。

16) 吉村玲子「ヒンドゥー寡婦の再婚と権利」叢書『カースト制度と被差別民 第二巻 西欧近代との出会い』(明石書店, 1994), 253-54頁参照。

定する寡婦像が、上位カーストのみならず、ヒンドゥー教徒の大多数であるシュードラにも美德の象徴として捉えられていたことを伝えている。

一方、キリスト教徒と再婚したシータは、ブラフマンの慣習を模倣してヴァルナの上昇を求めるソーナールにとって、疎ましい存在となったに違いない。彼女が夫のイギリス人仲間と食事を共にしたという噂だけで、カースト仲間は勿論、ナレンダやエラからも疎外される様子には、正にイギリス支配下で金融業にも進出して裕福になったソーナール・カーストの「サンスクリタイゼーション」が投影されているように思われる。¹⁷⁾

同胞からの迫害にも拘らず、シータがベナレスへ行って身を清めることもなく実家へ戻らなかったのは、シータの義理の従兄弟ラム・ダスが彼女から相続財産を奪うためにキリスト教徒と共食したというデマを吹聴したことが発覚した結果であった。シータが夫の配慮によってカーストの掟を厳守して生活していることを確認したヒンドゥー教徒の同胞らは、彼女との交際を再開する。ナレンダやエラも、「家を清める」必要がなくなり、再び「わが子」としてシータを家に招いて食事を共にするようになる。そのためか、シータはシリルへの愛とヒンドゥー信仰の葛藤に苦しむようなこともなくなる。またラム・ダスがアズラエルを唆

してシータの前夫を殺害させたことも立証され、亡夫の築いた財産を確保したシータは、生まれ故郷の近辺に滞在する限り、経済的にも幸福な生活が送れるかのように感じられた。しかし、そのような彼女を再び不安に陥れるのが、ヒンドゥー寡婦の充実した人生のために、その再婚を法的に許可したイギリス人であるというのは、何とも皮肉な話である。

V

ノールプールのイギリス人にとって、民事法的には許容されても¹⁸⁾ ヒンドゥー風の結婚式を挙げたシリルとシータを、正式な夫婦として社交界に招くことはできなかった。もっとも、ヒンドゥー教徒であるシータは、キリスト教徒と食事の席につくこともなかったので、シリルの同胞の好奇心な眼差しに晒されることも、人種差別的な扱いを直接受けることもなかった。しかし、彼らはシリルの予想以上にインド人との結婚を白眼視し、彼がシータと縁を切るのを望んだ。

中でも、インド人すべてを「黒んぼ(niggers)」呼ばわりするスミス夫人は、いかにシータの教養の程度が高く、その肌の色が白くとも、インド人の彼女がイギリス政務官代の妻であることに妥協できず、二人を何とか引き離そうと積極的に陰謀を練る。そ

17) この点に関しては、小谷汪之著『不可触民とカースト制度の歴史』(明石書店、1996)、183-84頁参照。

18) イギリスでは、1836年以降、従来の国教会内での宗教婚に加えて、結婚登録官(Registrar of Marriage)の立ち会いによる民事婚が公認されるようになった。また理論的には、外地で結婚式が挙げられた場合は、司祭の臨席なしでもコモン・ロー上、有効と見なされたはずである。この点に関しては、J.ペイカー著、小山貞夫訳『イングランド法制史概説』(創文社、1972)、440-45頁参照。

のために、スミス夫人はシリルが友人フィリップ・モスティンの妹グレイスと結婚するという根も葉もない噂を広めて、それがシータの耳に入るように謀り、二人の間に水を差そうとする。また、シータをカースト違反者として窮地に追いやるために、彼女とイギリス人との会食話をねつ造したのも、デマを広めたラム・ダスではなく、彼女の行動を召使いに見張らせたスミス夫人であった。これらの奸計が効をなさないことに業を煮やした彼女は、挙げ句の果てに、二人の結婚をシータが娼婦でもあるかのように形容して、シリルの母親に告発する。

スミス夫人がこれほど陰険な人種差別主義者として描かれているのは、白人社会と原住民の世界に軋轢をもたらし、両者を疎隔させたと言われる、いわゆるMEMSAB（植民地の奥方）の問題を作者が意識していたためであろう。この点に関して、ロナルド・ハイアムの次の指摘は、スミス夫人やその女友達が、アングロ・インド小説でしばしば批判されるMEMSABのステレオタイプであることを理解するうえで、参考になる：

女たちが構成する集団の中で、MEMSABたちほど否定的に語られる例はほとんど存在しない。イギリス人がインドで犯した最大の誤りは、イギリス女性をそこへ連れだしたことだ、と長く語られてきた。そうすることで男たちは、インド人たちを友人として見るができなくなった、とされる。MEMSABたちが帝国の社会的エチケットを洗練させていくにつれ、肌の色に従って区分線を引こうとするこうした女主人たちの手で、人種差別のための新たな基準が設けられた、とされる...ふさぎ込んでいて病弱、心が狭

く不寛容、原住民に対して意地が悪い、召使いに對して横暴で冷酷、いつも退屈している、悪意のこもった噂話ばかりしている、浮気好き、インド人女性たちに対して残酷なほどに無関心で、絶望的なまでに彼女たちから距離を置こうとする。¹⁹⁾

このように批判されるMEMSABが、実際にインド在住のイギリス女性の典型であったかどうかは、いささか疑問であるが、MEMSABがイギリス人とインド人の乖離の元凶であるとしても、問題にされるべきは、彼女たちの女性的な嫉妬深い性格や、渡印後の好ましからざる環境よりも、彼女たちがはるばるインドまで引きずってきたヴィクトリア朝の精神風土や、イギリス女性を利用して、現地妻を排除しようとした東インド会社の政策ではないだろうか。物語の中でも、シリルが一時的にしるシータとの結婚生活に自信を失った原因は、MEMSABの中傷やいじめがその直接の原因ではなく、東インド会社の上官や本国のシリルの兄ヒルトン卿が二人の関係を、「面倒を見るべき原住民の掟に反する」(238)とか、イギリス支配者の体面を汚すという理由で非難したからであった。シリルには、「シータを彼が故意に唆した」という噂を鵜呑みにする上官の抗議は「無遠慮な独断」として退けられても、二人の結婚を知った兄からの手紙には、返事の書きようもなかった。それは、手切れ金を使ってでもシータとは別れるべきであるという意向を示唆するものであった：

君が結婚という体裁で取り繕って同居している人物は、ヌール・マハールのように美しく才芸のある人物かもしれない。しかし私にとって、彼女は関係をもってし

19) ハイアム, 前掲書, 162-63頁参照。

まって後戻りできなくなるまで、君を誘惑し続けようと企んだインドの土民にすぎない。本当に心の底から、君が彼女と出会わなかったらどんなに良かったらうと思っている。ここイギリスでは、彼女は君の妻の座に着くことはできないだろう。君もよく考えれば分かるだろうが、シータのような人間を我々のような旧家の一員だと認めるなんて、考えるだけでも愚かしいし、有り得ない。ああ、愛する弟シリルよ、目を覚まさなくてはいけないよ...もし、いくらかの金がシータや彼女の同胞を満足させるなら、私に催促するだけでいいんだよ。その金額がいくらになっても、君の自由が買えるなら、それは私の生涯で最も値打ちのある安い買い物になるだろう。(238)

ヒルトン卿が二人の結婚に反対する理由として、まず考慮されるべきは、イギリス国教会の聖職者が関与しない結婚が、当時のイギリスの貴族階級に容認されなかったことであろう。世俗的な婚姻法が制定されたにもかかわらず、実質的にはイギリス国教徒であることが、支配階層の一員であるための必要条件であったことは、元宣教師のブラット夫人がシータに改宗をすすめるのに、ヒンドゥー教徒でいる限り、彼女はイギリス人にとって、シリルの現地妻ではあっても正妻とは見なされず、生まれてくる子も私生児であることを論拠にすることからも裏付けられる。

しかし、たとえシータがキリスト教徒に改宗したとしても、爵位を継ぐことを期待されているシリルの正妻になれそうもないことは、彼女に対するスミス夫人やヒルトン卿の人種差別的な見解からも窺い知れる。つまり、シータがイギリス社会の一員になれないのは、彼女が異教徒であると同時に「劣等人種」と見なされたインド人である故である。そのためにいかに彼女が英語に上

達しようと、ミサを見学するほどキリスト教に関心を示しても、周囲のイギリス人たちは、シリルが彼女と縁を切るのを望む。このことを熟知しているフィリップは、「もし、僕たちの忌まわしい社会的偏見がなかったら、何人かのイギリス婦人より、シータのような女性を妻にもつほうが幸せだろう(87)」と言いつつ、ヒルトン卿の心境に共感してしまう。彼にとって心配なのは、シリルが教養の中身や精神性が異なるシータに飽きてしまうことや、彼女との結婚で社会的地位や名声を失うことであった。フィリップの妻にしても、二人の愛の深さには感動するものの、イギリス男爵夫人にふさわしい義妹グレイスと結婚するために、彼が早めにシータと離縁することを願わざるを得なかった。

ノールプールのイギリス人の「忌まわしい社会的偏見」が、インドの宗教や風俗習慣はヨーロッパ文明に取って代えられるべき後進的なものであるという通念に基づいていることは、言うまでもない。それは19世紀前半から台頭した福音主義や功利主義的改革思考の煽りを受けて、インドへ赴くイギリス青年や将来のメムサーヒブの心にも浸透していった。そのために大反乱の年代までにはイギリス支配者一般は、ウィリアム・ジョーンズが崇敬の念を抱いたインド古代文明へ関心をもちとうとはしなくなってしまった。そのうえ、彼らはキリスト教や西洋文明を容易に受け入れないインド人を「劣等人種」として差別するあまり、彼らと個人的な交流をもつことを避けるようにもなった。かつては盛んであった異人

種間の現地結婚は勿論、特定のインド女性と親密な関係をもつことさえ、次第に白眼視されるようになったと言われる。本国から多数の宣教師やイギリス娘がインドへ送り込まれたのも、イギリス支配者を現地で誘惑から遠ざけて、彼らと被支配民族との間に一線を画する政治上の配慮からでもあった。²⁰⁾

このような時代背景を考慮すると、確かにシリルのように、インドの古典を愛読したり、ヒンドゥー教徒の妻の信仰を尊重するイギリス支配者は稀であったに違いない。当時、インド女性を愛人として困うイギリス人は少なくなかったが、彼にとってシータを日陰者として貶めたり、たとえヒンドゥー風ではあってもその結婚の誓いを破ることは道義に反することに思われた。シリルがそこまでインドの文明や土民の人権を尊重する人物として描かれているのは、以下のように作者に当時のイギリス支配者のインド統治のあり方を批判する意図があったからである：

私は、心から、本当に心底から、シリル・ブランドンのような人物が、まだ多く存在するにしても、もっと多くいてくれたらと思う...彼のような人物は、インドを地獄のような巢穴だとは言いきらないし、土民を軽蔑して悪く言ったりもしない。また彼らに共感を抱いて手を差し伸べることを拒んだり、土民をあたかも野蛮な黒人でもあるかのように、「黒んぼ」とか「黒い奴」と見なさないし、彼らの長く続いている慣習や作法に妥協すると自分の

品位が下がるとも考えたりしない...シリルのような人々は、理解してもらえないのであろうか。なるほど理解されるかもしれないが、軽蔑されてしまうのだ。そして悲しいことに、最近では横柄にも自分のほうが、シリルのような善良で偉大な人物よりも賢いと思う人々が次々に現れて、インドの年代記に名を残している！
(70)

ここで作者が批判したいのは、ダルフーヅ(Broun Ramsay Dalhousie, 1812-60)やチャールズ・キャンニング(John Charles Canning, 1812-62)のような人物のことであろうか。テイラーにとって、藩王国を次々に併合したり、急進的な欧化政策を奨励してインド社会に弊害をもたらした彼らは、「白人の重荷」を忘れかけた人物に映ったようである。²¹⁾確かにイギリス人がもたらしたキリスト教文明に触れた一部のヒンドゥー知識階級は、インド社会の旧弊に目覚め、女性の社会的地位の向上等に貢献したと言えよう。しかし、ヒンドゥーやイスラムの慣習や嗜好を無視したイギリス式制度の導入や、キリスト教による文明化政策は、インド人側に様々な問題を引き起こした。例えば、布教活動によってヒンドゥー教徒がキリスト教に改宗したり、イギリス人が制定した法律に守られて寡婦が再婚すると、ヒンドゥー法典や慣習による家督や財産の相続問題が複雑化したり、家族関係が崩壊するという事態が生じた。鉄道建設さえも、駅や列車内でカーストが入り交じって飲食をするというヒンドゥー信仰上

20) ハイアム, 前掲書, 164頁参照。

21) テイラーは『研究者用インド史の手引き』の中で、ダルフーヅ総督が「失権の原理」をふりかざして、インドの藩王国を次々に併合した政策を、「土民に、イギリス支配の利点よりも、かつてのイスラムの暴政を思い出させる取り返しのつかない失敗」と批判している。Philip M. Taylor, *A Student Manual of the History of India*, (1870, rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1986) 700-02参照。

のタブーをもたらす危険性がともなった。さらにこれらの宗教上の問題に加えて、伝統的なインドの社会秩序を揺るがしたのは、イギリス的な観念に基づいた土地税政改革で、それは一部の地主や農民から、旧来の利権や耕作権を奪って、彼らを貧困に追いやってしまったのである。テイラーによれば、このような事態は、そもそも「土民の長く続いている慣習や作法に妥協すると自分の品位が下がる」というイギリス支配者のインド人に対する共感の欠如や傲慢さによって生じたと考えられる。40年余りインド支配に携わった彼にとって、イギリス人の支配によって不利益を被ったり、カーストや信仰を失うことを危惧したインドの民衆が反乱に加わった経緯は決して理解できないものではなかったようである。彼がえてシ ril のような理想的な人物を描いたのも、大反乱を契機に益々インド人に共感を抱かなくなったイギリス支配者にインド統治のあり方を問い直したかったからである。

シ ril を襲うアズラエルの凶刃に立ちほだかって斃れるというシータの最期は、大反乱を舞台にする物語の流れの中で、さほど不自然ではないように思われる。しかし、反乱を鎮圧したシ ril が兄の遺志を継いで、グレイスを妻に迎えヒルトン邸で平和に暮らすという物語の顛末は、異人種間の恋愛ロマンスとしては、いささか後味の悪い幕切れであるという印象を否定できない。こ

の点に関して、ヒルダ・グレッグは次のように述べている：

... 読者がシータのキリスト教への改宗と、その後のシ ril との長い幸福な人生を期待しかけた時に、彼女は反徒の急襲を警告しながら致命傷を負ってしまう。ブランドンの難局に突然終止符を打つこの結末は、チェスの競技者が勝ち目が無いと言ってゲーム台をひっくり返す行動と同じような印象を与える。しかも我々読者の憤りは、主人公の彼がシータと知り合う以前から適度に興味を覚えたイギリス娘と、一同に歓迎されて結婚するという話によって静めることはできない。²²⁾

ここで、「ブランドンの難局に突然終止符を打つ」という結末が問題にされるのは、19世紀後半から20世紀初頭にかけてインド人の愛人や内妻の急死によってイギリス男性が窮地から救われたり、異人種間の恋愛や結婚はハッピー・エンドに終わらないというアングロ・インド小説が流行したためであろうか。²³⁾ そのような小説に親しんだ読者に、シータの死が宗教的と言うよりむしろ便宜的なものとして捉えられたのは当然かもしれない。しかし、彼女の最期には身を挺して夫の命を救うという「サーヴィトリー物語」のテーマが、『シータ』の伏線になっていることをあらためて感じさせるものがある。

そもそも『ラーマヤナ』に登場する貞女の名をもつシータは、ヒンドゥー女性的美徳の体現者であり、「ありそうもない結婚」を解消するためのスケープゴートと見なされるべきではない。彼女は死ぬことによって、シ ril を社会的ハンディキャップから

22) Gregg, *op. cit.*, 222.

23) 異人種間の結婚を取り扱ったアングロ・インド小説に関しては、Bhupal Singh, *op. cit.*, 165-94参照。

解放することになるが、他のアングロ・インド小説にしばしば登場するインド女性とは異なり、イギリス男性の心変わりによって事もなげに捨てられたり、忘れ去られる存在ではない。シータの愛の深さに感動したシリルは、グレイスと共に、彼女の思い出を大切に生きていくのである。シリルの帰国や再婚についても、それはイギリスの爵位を継ぐ人間としては、当然とも言うべき現実的な選択ではないだろうか。結果的にインドは彼にとって、永遠の住処ではなく、「白人の重荷」を一時的に背負って名声を獲得するための地であったとしても、そのようなインドへの関わり方が、当時のイギリス支配者の習いであったことは否定できない。

また「シータのキリスト教への改宗」という言葉からは、1897年においても、ヒンドゥー教徒とキリスト教徒の結婚がイギリス人にとってタブーであったことが読み取れるが、グレッグにとって、シータが改宗しないままに抹殺されるという筋立ては、それほど期待はずれに感じられたのであろうか。なるほど、国教会の礼拝を見学したシータが、聖餐を受けられない自分とイギリス人らとの間を隔てる「深い溝」を意識しつつ、キリスト教の神が「すべての人間に慈悲深い」というような感想を抱いたり、今際のきわで「ガーヤトリー」と賛美歌を交互に唱える場面は、彼女のキリスト教に対する両面感情を描いているように感じられる。しかし、ヒンドゥー哲学に心酔していた彼女が、たとえキリスト教に好意的な感情をもったとしても、将来的に改宗に感じ

たかどうかは定かではない。またプラット夫人から、イギリス人にとっては内妻という立場を示唆されて、彼女が心配したのは、自らの信仰が動揺することではなく、夫婦の間にできるかもしれない子供の社会的立場の問題であった。自らがヒンドゥー信仰を捨てない限り、シリルも社会的地位を失うことを知ったシータが取るべき道は、「自分の命にかえても夫を救う」というサーヴィトリーの理念を体現することで、この意味において彼女の死は報われるべきであると考えられる。

おわりに

インドの大反乱を背景にしたイギリス小説の中で、『シータ』は当時の英領インドが抱えていた様々な社会問題を、最も如実にしかもロマンチックに描いている物語であろう。この作品が、20世紀に至ってアメリカやインドの批評家に評価されたのは、1870年代の「反乱小説」にしては珍しく、異人種間の結婚問題を描きつつ、大反乱の根本的な原因を、イギリス人のインド人に対する共感の欠如に求めていることによる。しかし、反乱を鎮圧するシリルが理想的な支配者として性格付けられ、シータを失った彼の現実的な再婚で締めくくられているこの小説は、イギリス人とインド人が宗教的な差異を乗り越えて共存することの困難さを描く一方で、イギリスが政治的な転換によってインド支配を継続することを正当化している作品とも言えよう。